

常総市立水海道中学校 三年

自分と世界に夢を

豊とよ 永なが 征ゆき 雄お

世界の壁を越える架け橋になる、これが僕の夢です。僕の本名は、豊永・ジョアオ・ペドロ・征雄といえます。日本人の祖父とブラジル人の祖母が結ばれました。三世のハーフとして僕は今、日本の地で生活しています。

十五年間生きてきて、「壁」を感じたことが何度もありました。ひとつは、言葉や国籍のことです。普段家族と家で会話するとき、僕たちはポルトガル語を使います。ですが、学校では授業中も、周りの人も、使うのはもちろん日本語です。周囲の人たちが話している言葉が分からないこともあり、学校生活をつらく感じることもありました。

そしてもうひとつ、僕は足にハンディキャップをもっています。小児まひを患っている僕は、他の人と比べて思うように体を動かすことができません。物心がついた頃に親

からこの病気を聞かされたときは、ショックでした。片足を引きずるようにしか歩けない日々、スポーツや体を動かす趣味などを諦めようと思ったことは何度もありました。

ですが、僕にとって恵まれていることがあります。それは、人間関係です。学校の友人は「一緒に遊ぼう」と声をかけてくれたり、僕に助けが必要な場面では、何度も助けてくれたりしました。共に笑い、学び合う彼らともっと分かり合いたいと思います、日本語を学ぶことにも前向きに取り組みました。

友達との出会いは、僕に勇気をくれました。二年前、僕は足の手術をしました。三か月に及ぶ手術、リハビリの末、以前よりも軽やかに動くことができました。

まだまだできないことはありますが、自転車で通学し、体育の時間で体を動かせることに、とても満足しています。

この十五年間で立ち上がった壁を、僕は自分の強い意志で、またある時には周囲の支えで乗り越えることができました。僕にとってクラスメイトや先生たちは、第二のファミリーです。僕の生活する中学校では、日本人だけでなく、多くの国籍の人がいたり、幅広い年代の人たちが通う、夜間学校が開かれていたりします。国籍や年齢はバラバラですが、ひとつの家族のように協力し合いながら生活しています。

しかし、世界に目を向けると、まだまだ国籍や偏見、障がいによる差別は多いように感じられます。自分のエゴで相手を弱者と判断し、無意識に傷つけていることもあるでしょう。差別問題を解決するために、社会的包摂「ソーシャル・インクルージョン」が必要だと僕は思います。誰も排除されることなく、誰もが社会に参画する機会をもつという意味の言葉は、SDGsが大切にしている「誰一人取り残さない」という理念を端的に表しています。

誰一人取り残さない社会を目指すために、僕にできることは何か。豊永征雄という一人の人間として接してくれたクラスメイトや先生のように、僕は、人と社会、そして、

世界をつなぐ架け橋になりたいと考えます。今の僕は、学校生活の中で、ハキハキと挨拶することを心がけています。

人をつなぐコミュニケーションの第一歩である挨拶で、僕は毎日友達と心を通わせています。また、僕はポルトガル語と日本語を話すことができ、学校では英語も勉強しています。将来は、大学進学を目指しながら言葉の勉強にはげみ、多くの国の言語を生かした仕事に就きたいです。言葉の壁を超えて、人と人、国と国が手を取り合う世界になれば、誰一人取り残さない社会に一步近づくと僕は考えます。その助けとして、数か国語を扱えるという自分の長所を最大限に生かしたいです。このような仕事に就くためには、容易ではないでしょう。ですが、僕は1%の可能性と九十九%の信念をもって、これから先の困難にも立ち向かっていきます。友人が僕を助けてくれたように、今度は僕が困っている人を助けて、一緒に壁を乗り越えていきます。

